

## 文献紹介

〈書籍〉

Martha Bremser編 (1993)  
International Dictionary of Ballet vol. 1-2  
St. James Press

danceの事典ではなく、あくまでもballetの事典である。カニングハムは載っているが、グラハムやヴィグマン、無論ラバンの記載はない。フォーサイスやキリアンはあるが、ビルギット・クルベリの息子マッツ・エックの項はない。このような編集意図のもと、しかし選ばれた項目のジャンルは、振付家、ダンサー、バレエ作品、舞台美術家、音楽家、教師などにわたり様々である。さらに人物の説明の場合には、その人の経歴の他に彼が携わった(振付けたり、あるいは踊ったりした)作品が、そして作品の場合には作品のあらましの他に様々な改訂版や新版の初演が、それぞれ年代ごとに羅列されていて、大変に便利である。項目ごとの関連文献は基本的に英語文献であるが、これも親切である。

Valerie Preston-Dunlop編 (1995)  
Dance Words  
Harwood Academic Publishers

ラバン研究の最前線に立つ研究者による意外な余芸の披露、いや専門研究の過程に生じた芳醇な余滴ともいえるべき“労作”である。著名なダンサー、振付家などが口にした、舞踊にまつわる言葉の数々を集大成したものであるが、現場に直接係わる者たちの、言語による舞踊の捉え方は、舞踊を享受する側の者にとっても興味の尽きないものである。舞踊ファン層の拡大に大きく貢献する好著といえよう。

G. Oberzaucher-Schüller編 (1992)  
Ausdruckstanz  
Florian Noetzel

1986年の秋、一週間にわたりバイロイト大学音楽演劇研究所が「表現主義舞踊」についてのシンポジウムを主催した。当時分断されていた東西の両ドイツの垣根を越えて、また海外からも老若男女の大勢の学者がトゥルナウ城に集って、このテーマのもとに本格的な研究発表を行なったのだった。これはその時の記録であり、そこで発表された幾多の研究の集積である。記述の体裁は、論文として書かれたものから、口述筆記されたものから様々であるが、内容は多義にわたっており、15個にも分けられたテーマにそって、41もの論文から成っている。副題に「20世紀前半の中央ヨーロッパの動き」とあるが、この副題の意味するところをはるかに越えて、「表現主義舞踊」を

博く考察したものとなっている。「表現主義舞踊」が、今ようやく本格的な学問対象となりえたのであり、またこのテーマへの真っ当な研究上の方法論を提示したともいえよう。これ以降、ここにおさめられた多くの論文が、その論旨に肯定するにせよ否定するにせよ、議論の出発となっていくことだろう。

Tim Scholl (1994)  
From Petipa to Balanchine  
Routledge

19世紀から20世紀へのバレエの歴史を〈断絶〉とみるのではなく、〈連続〉としてとらえようとする史観が、画期的で珍しいというのではない。ディアギレフのロシア・バレエというよりも、むしろプティパの作品(例えば「眠れる森の美女」)の中にすでに、後のバランシンに行き着くモダン・バレエの萌芽をみる論理の展開に当たって、歴史を推進していった当事者たちの言説を、丹念に直接にロシア語の文献に当たって検証していったというのが、この著者の何よりの強みであり、また論理の説得力を生むものである。

舞踊プロパーの学者が、舞踊について語ったり論じたりするだけではない。日本だけでなく世界的にも、舞踊以外の領域からの研究者による舞踊へのアプローチが盛んに行なわれて、舞踊学が学としての新生をはかろうとしているようである。著者は、ロシア文学の研究者である。

Georgette Schmeer (1994)  
Movement Improvisation  
Human Kinetics

ここ数年の間に、即興舞踊に関する著書はかなり出版されているが、本書は其中でも出色の内容を誇るものである。検証を重ねた163のテーマを軸に、即興の舞踊教育における意義と有効性を説く。生徒・学生に「動き」を通じた想像と創造の瞬間を実感させるための、心憎いまでの手立てが示されており、指導者必読の書といえよう。

Daniel Nagrin (1994)  
Dance and the Specific Image : Improvisation  
University of Pittsburg

即興を論理的に語るということは、ある種の矛盾を孕むものだが、敢えてそれに挑んでいるのが本書である。舞踊即興に係わるメカニズムを多面にわたり追求・解明を試みる運びには説得力がある。もちろん、ブラクティカルな要素についても豊富な具体例を取り上げて、読者の興味を引きつける。ダンス・セラピストによる活用も勘案して編まれた内容は、その点をもってしても、すでに他の即興舞踊関連の書とは一線を画しているとい

えよう。

Jacqueline Smith-Autard (1994)

The Art of Dance in Education

A & C Black

英国の舞踊教育界で論客と称される著者による久々の上梓である。変容する英国の舞踊教育の世界において、とりわけ学校ダンスの指導を受け持つ関係者の間では教科が依って立つ理論の枠組みの提示が待たれていた。その点からも、本書は文字どおり待望の書といえる。「創る・見る・踊る」という教育過程の再検証と、舞踊教育がいかに芸術・審美・文化教育といった大きな学問領域に寄与できるかについても、鋭い筆致で迫っている。また、ナショナル・カリキュラムへの対応についても、並外れた洞察を示している。

Bent Schoenberg (1994)

World Ballet and Dance vol. 5 1993-4

Oxford University Press

定期的に刊行される舞踊年報の類であるが、世界各国の第一線で活躍する舞踊評論家による、自国で上演された舞踊に対する論評は、いつもながら読者を居ながらにして舞踊鑑賞のワールド・ツアーへと誘う。なお今回は、ロンドン・コンテンツポラリー・ダンス・シアターの芸術アドバイザー、ロバート・コーハンによる「Avoiding Injury」が特別に寄稿されており、それは、ダンサー、振付家はもちろん、広く舞踊教育関係者にも一読の価値を有しているものである。

〈論文〉

Ed Groff (1995)

Laban Movement Analysis: Charting the Ineffable Domain of Human Movement

The Journal of Physical Education, Recreation and Dance

ボディ・ダイナミクス・スペース・シェイプという、きわめてアメリカ的な四つの視点からラバンを解釈する論文であるが、そのバイアスを差し引いてもなお、ラバン入門には恰好の著作といえよう。関連成書への導入、実践への契機の根付けの役目を十分に果たしている。

〈後記〉

大貫、松澤が、ここ数年出版されたものの中から、両者の責任によって適宜、選択して紹介した。

平成6年度 舞踊学関係修士論文題目一覧

修 士 論 文 題 目	氏 名	大 学 院 名
舞踊における前後開脚系跳躍の動作特性	亀山 愛子	お茶の水女子大学
沖縄舞踊における上肢動作の特性 ——技法「コネリ手」を中心に——	波照間永子	お茶の水女子大学
幼少期におけるホッピングパターンの発達 ——ホップ，キックを中心に——	邊 仁 敬	お茶の水女子大学
家庭も仕事もスポーツも ——子育て期にある高学歴女性の性別役割分業 の実状と運動，スポーツ実施状況について——	佐野 信子	お茶の水女子大学
韓国仮面劇における諧謔性の動作学的考察 ——鳳山(ボンサン)タルチュムのハルミを中心に——	尹 暎蘭	お茶の水女子大学
バレエのピルエット，アン・ドウオールにおける下肢位相 の動作特性	大岡 直美	お茶の水女子大学
Natalia Makarova研究 ダンス刺激が音楽反応に及ぼす影響について	前田しのぶ 大岩 雅子	お茶の水女子大学 筑波大学大学院体育研究科
民間企業における芸術文化支援活動の一考察 ——舞踊を中心として——	薩佐久仁子	筑波大学大学院体育研究科
大学における舞踊教育の比較研究	五十嵐生野	日本女子体育大学大学院
舞踊家の人体比例に関する研究	坂本 秀子	日本女子体育大学大学院
日本の民俗芸能における女性像 ——巫女舞を通しての一考察——	高橋 厚子	日本女子体育大学大学院
『舞曲扇林』考 ——日本舞踊の原点（基本と本質）——	丸茂美恵子	日本大学大学院芸術学研究科
舞楽『蘭陵王』の研究 ——生きている随唐文化——	范 旅	日本大学大学院芸術学研究科
京舞井上流	岡田万里子	早稲田大学大学院文学研究科

(以上、平成7年9月30日までに御回答いただいた該当論文を掲載した)

〈訂正〉

第17号49頁左列下から10行目「フランクリン・ファーン  
ネス美術研究所で美術史を学ばれた」を「フランクリン・フ  
ァーンネスで実地研修，ニューヨーク大学の美術研究所で美  
術史を学んだ」に訂正致します。